

文献案内——開発、リスク、人間の安全保障

峯 陽一

(JICA 緒方貞子平和開発研究所 研究所長)

人間の安全保障の概念の基底には、1998年にノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センの哲学がある。人間の安全保障の母体である人間開発の考え方は、センのケイパビリティ（潜在能力）の理論から生まれた。2003年の人間の安全保障委員会（緒方セン委員会）の報告書に理論的な基礎を与えたのも、センだった。私たちの今回のレポートが全体として依拠している計測に対するダッシュボードのアプローチも、もともとは国際委員会において、スティグリッツとともに、センが提案したものである。

人間開発はセンのケイパビリティ論に対応する。では、人間の安全保障に対応するセンの理論的な枠組みは何だろうか。

私は、それはエンタイトルメント（権原）をめぐる議論ではないかと思う。アマルティア・セン【黒崎卓・山崎幸治訳】『貧困と飢饉』（岩波書店、2000年、原著は1981年）において、センは、南アジアとアフリカの飢饉を分析している。そこでは、同じ飢饉でも、土地をもたない農民、あるいは都市の日雇い労働者など、所得階層や居住地によって、人びとの被害の程度がまったく異なることが描き出されていた。

人びとの貧困、そして暮らしの現実、全国平均の統計データではわからない。多くの国では、食糧生産が平年よりも多い年に、飢饉が勃発している。国民経済を単位として整備された統計を、地方へ、家計へと脱集計化（disaggregation）していくことによって、どこで、誰が、どのように取り残されているかがわかる。センの初期の重要な作品である『貧困と飢饉』は、「誰も取り残されない」社会をつくるというSDGsの理念を先取りするものだった。

この本でセンは、与えられた社会的条件のもとで個人が正

当に要求できる財をエンタイトルメントと呼んでいる。アジアとアフリカにおける飢饉、すなわち食糧エンタイトルメントの危機を分析した彼のアプローチを、より一般的な危機論、リスク論に拡張していくとき、規範の分析を超えた鋭利な政治経済学としての人間の安全保障研究が生まれるのではないだろうか。

ここで検討すべきなのが、より一般的なリスク論である。80年代の後半、ウルリッヒ・ベック【東廉・伊藤美登里訳】『危険社会』（法政大学出版局、1998年、ドイツ語の原著は1986年）などの書物を通じて、新たに出現したリスク社会の様相が幅広く論じられ始めた。飢えや貧困といった開発の課題、東西のイデオロギー対立といった政治の課題に限定されない幅広い脅威が自覚されるようになったのである。

ベックのリスク社会論は、米ソの中距離核ミサイル配備を懸念する欧州市民の反核運動を背景に書かれた。水害で家を押し流されるのは、危険な低地で暮らす低所得者層である。その一方で、核戦争になれば、金持ちも貧乏人も等しく命を失う。リスク社会において富者と貧者は異なる経験を強いられるが、リスクに対する不安はすべての人びとを結びつける。

気候変動、感染症、経済危機、武力紛争など、私たちの同時代の危機においては、階級の論理とリスクの論理が複雑に交錯している。東西冷戦時代の末期に提示されたベックの議論は、人間の安全保障論の誕生を予告するものだったとも言える。

グローバルな危機は、南と北の区別なく、世界中の人びとに苦難を強いる。その一方で、私たちの苦しみを簡単に世界



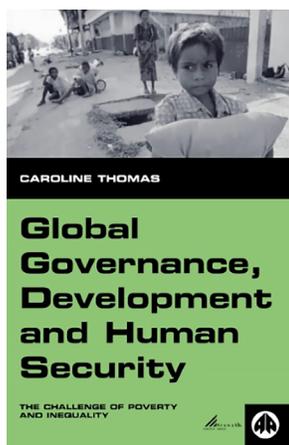
本レポートで述べられている見解は執筆者個人の見解であり、JICA や JICA 緒方研究所としての見解を示すものではありません。

共通と呼んで薄めてしまわないでほしい、という人びとも世界にはいる。

20世紀の世界史における最も大きい変化は、西洋の諸帝国が崩壊してアジア、アフリカの植民地が独立したこと、そして、主権平等の国民国家で構成されるウェストファリア体制が地球全体を覆うようになったことだろう。国家建設(nation-building)が歴史的な課題となり、それに対するドナーの対応として、自助努力支援が求められたのだった。

この観点からすると、主権国家の基礎が不安定で、深刻な貧困とリスクにさらされている途上国の人びとこそが、人間の安全保障の挑戦を真正面から引き受けているということになる。

今では忘れられているが、「第三世界セキュリティ学派」とも呼ばれる研究者たちが、そのような文脈でセキュリティ研究を拡張しようと試みたことがある。たとえば、イギリス国際関係論の反主流派だったキャロライン・トーマスは、1994年の人間開発報告書の後の時期に、(R2P¹とは区別される)今日の人間の安全保障に近い議論を提示している(Caroline Thomas, *Global Governance, Development and Human Security: The Challenge of Poverty and Inequality*, London: Pluto Press, 2000)。



トーマスによると、軍事の観点からだけセキュリティを語る枠組みは狭すぎる。グローバル化による貧困と不平等から一人ひとりのセキュリティを守るために、国際開発の経路を刷新し、国際金融機関を再編する必要がある。彼女は、国際的、国内的な不平等に苦しむ民のためにこそ、人間の安全保障が必要だと主張した。

後発国が急激にキャッチアップを実現しつつある今、先発国の国際関係論の研究者が「第三世界の大義」を支持する時代では、もはやないかもしれない。しかし、「人間不安全」がサウスの周辺部で生きる人びとに不公平に重くつきまとっているという現実是不変である。このことは、ポストSDGsの議論の焦点のひとつにもなっていくだろう。

農村に道路が通り、学校ができて、診療所ができる。市場

で農産物を売れるようになる。工場に通って働けるようになる。こうした変化が徐々に人びとの選択の機会を増やしていくことで、人間開発が実現される。

しかし、実際の人間開発の経路は、山あり谷ありである。人びとは人間の安全保障の課題を(可能な限り)乗り越えて、前に進んでいく。このダイナミクスを伝えていくにはどうしたら良いのだろうか。

ここでは、エビデンスに加えて、ナラティブ(物語)が大きな役割を果たすのではないだろうか。その意味で斬新な実験に取り組んだのが、エステル・デュフロ・シェイエンヌ・オリビエ絵 [コザ・アリーン、峯陽一訳]『小学生のための貧困の経済学えほん(全5巻)』(フレーベル館、2025/26年)である。



この絵本シリーズでは、架空の途上国の村の小学生たちが、様々な事件——経済学者たちがリスクと呼ぶもの——に直面しつつ、友だちや大人たちと一緒に問題を解決していく。不登校、感染症、老人の孤立、森林破壊、ジェンダー不平等といった課題を、子どもたちが大人を導き、ときに喧嘩しながら軽々と飛び越えていくのだ。

アビジット・バナジー、マイケル・クレイマーとともに2019年にノーベル経済学賞を受賞したデュフロは、ランダム化比較試験(RCT)にもとづく開発課題の革新的な研究で知られる。しかしデュフロは、「冷たい科学者」ではない。このシリーズで彼女は、エビデンスにもとづく発見を、ときに切なく、ときに微笑ましい物語に仕立てて、未来の世代に向かって伝えていく。小学生たちが(小学生だからこそ)直感的に理解できるような物語を一緒に読みながら、生徒と先生、子どもと親が、対話を通じて世界の開発と安全の課題の理解を深めていくのである。

シェイエンヌ・オリビエのイラストも独創的である。登場人物のデザインは温かみがありながら幾何学的で、スターリンに弾圧されたロシア・アヴァンギャルドの美術を思い出させる。

¹ 保護する責任 (Responsibility to Protect)